

の経巻に奥書が確認され、平安時代にまゝめて書写されたものに、その後室町時代に至る長期にわたって少しずつ補写が行われていることが判明した。この調査は私にとって大変楽しく勉強になる作業で、二日間はいったいという間に過ぎてしまった。

さて、こうした調査の経験から、書跡の書風・筆跡からいかに情報を引き出すか、また、どのような情報が得られるのか、ということが私の問題関心となってゆく。さきの大般若経調査で見かけ、その後どうしても気になり続けていた右下がりの書風について調べてみたところ、それが院政期における典籍の大量書写と密接な関係にあることがわかってきた。「院政期文化を特徴づけるのは、狂疾的な人々のエネルギー」であるといわれているが、そのことと関連して、当該期文化の特色のひとつとして挙げられるのが、著しい数量尊重の風潮である。この風潮は学問の分野においても例外ではなく、この時代には夥しい数の典籍の書写が行われた。右下りの早書きの書風は、

この典籍大量書写のなかで育まれた書風と考えられる。そして文字が右下がりになるのは、本文を筆写するという行為に強く規定されている結果であると推測される。写すテキストを自分の正面に、料紙をその右側に置いて書写をすれば、当然右腕は右方にずれる。そのまま手首を中心に横画を引けば、右下がりの筆線となるであろう。数量を尊重する院政期文化は、膨大な量の典籍の書写を推し進める原動力となった。そして大量書写を可能ならしめるものとして、典籍をより早く正確に書写する技術が求められ、それに即応するかたちで右下がりの早書きの書風が生成したものと考えられるのである。

さて、以上のように、私は文字好きが高じて文字の歴史を学ぶこととなった。文字に関して、あるひとつの筆跡に関して、その背後に隠されたドラマが、私にはとても感動的だった。その感動を大切に、今も研究を続けている。耳をすませば、文字たちの声が聞こえるような気がして。

中国古代史とのつきあい

森 和

私は、学部・大学院では早稲田の東洋史に在籍し、現在は二一世紀COEプログラム「アジア」の客員研究助手として、中国の歴史について研究しています。今日は、自分自身の事例をサンプルにして、東洋史専修とはどういうところなのか、そこで何ができるのか、ということを紹介しようと思います。

一言で「中国の歴史」と言っても、政治制度や法律、経済システム、宗教、文化など様々な分野があることは周知の通りです。そうした多面的な「歴史」の中で特にこの分野を、という明確な意思もありません、東洋史専修を選んだ私が最初に興味を持ったのは、二千年以上も前のお墓から発見された絹に描かれた絵「帛画」でした。そこには赤い大きな円と、中に黒い鳥が描かれ、それぞれ太陽と鳥であるとされています。

「何故、太陽に鳥がいるのか」。このような非学問的な、下らない疑問を抱いたことが、実は、中国古代史とつきあい始めるきっかけになりました。歴史は文字を基礎にして組み立てられるものですから、どのような興味・疑問であれ、次に中国古代の太陽について書かれた文字、つまり「史料」を探して読んでいく、という段階に進みます。

そこで出遭ったのが『山海経』というテキストです。このテキストには表向き「中国最古の地理書」というもっともらしいキャッチコピーがありますが、中に記されているのはほとんどが神話伝説の類、それも解釈に苦しむような内容で、例えば、「并封」という動物が「巫咸」という国の東方に居る、その外見は蜺に似て、前と後ろのどちらにも頭があり、黒い、というような具合です。さて、ここで当然『山海経』が「史料」なのか、という疑問が浮かんでくると思います。そもそも「史料」とは何でしょうか。『史記』という歴史書を書いた司馬遷という有名な歴史家は、『山海経』に書

かれているような怪物については敢えて語りませんよ、と述べて、その史料的价值を認めませんでした。ところが、秦の始皇帝による中国統一以前、長江中流域を中心に栄えた「楚」という国のお墓から二つの頭をもつ蜺の形をした漆塗りの盒が見つかっています。この漆器と上述の「并封」との間にはどのような関係があるのか、あるいは無関係なのか、定かではありませんが、このような例を見ると、『山海経』の記述も全くの虚構や空想とは言えないようです。ですから、最初から使える「史料」という枠組みがあるのでなく、そこからどのような歴史を組み立てられるのか、「史料」に向き合う自分の姿勢次第で、どのような文字の羅列も「史料」になり得る、と私は考えています。つまり、『山海経』の不可思議な記述も、その時代背景、発信・受容した集団、そして当時の社会の状況などに考えを及ぼすことで「史料」になるのです。

では、『山海経』の背後にあるのはどのような世界でしょうか。このテキストには「巫祝」と呼ばれる人々が深く関わっていた、とされています。「巫祝」は一般的に「シャーマン」と訳され、様々な祭祀儀礼や占卜、病氣治療などに携わっていた人々を指しますが、彼らについて記した「史料」は少なく、これまではその実態を探ることが困難でした。ところが、一九七〇年代から中国各地で竹や木の簡あるいは絹に書かれた多種多様な一次史料が次々と発見されるようになり、今も現在進行形で増え続けています。従来の所謂「文献史料」では窺い知ることができなかったことが、このような新しい「出土文字資料」の増加によって明らかにされていく、という状況は「巫祝」のことに限らず、政治や法律、思想などありとあらゆる分野に共通するものです。今現在、中国古代史研究は新たな局面を迎えている、といった言い過ぎではありません。

一つ注意しなければならないのは、どのような「史料」であれ、文字ばかり追いかけていると、どうしても具体的なイメージ

がつかめず、抽象的な議論に陥りやすくなる、ということ。それを少しでも解消するためには、現場へ出かけるのが一番です。私の場合、“史料”が発見されたお墓に行っても普通は埋め戻されていますし、四川の山奥で出会った少数民族のシャーマンも古代の「巫祝」と直接リンクすることはありません。ですが、上手く説明できませんが、そうした経験が“史料”を読む上で重要になることは間違いありません。

以上、纏めてみますと、まず初めに興味・関心を持って、そこから“史料”探しや解釈など歴史とのつきあいが始まり、より深くつきあうために現場へ出かける、そしてまた新たな興味・関心が生まれて……、という具合に、この三つを往ったり来たりしているのが、東洋史専修というところであり、そこで行われている研究、ということになります。

私とイタリア史

高津 美和

早稲田大学の大学院に進学する以前、私は大阪外国語大学でイタリア語を専攻していた。外国語大学に在籍中の春休みに、私は初めてイタリアを旅行したが、これが私の関心を歴史研究に向ける大きなきっかけとなった。私は、カトリックの総本山であるヴァチカン、システイーナ礼拝堂にミケランジェロが描いた「最後の審判」に強い印象を受けたのである。画面中央に審判を下すキリスト、右下には地獄。画面全体を覆う、選ばれて天に上る人々と地獄に落ちてゆく人々。その表現の迫力に圧倒された私は、作者ミケランジェロをこの作品の製作へと駆り立てたキリスト教という宗教について知りたいと思った。帰国後、私はサヴォナローラというドミニコ会修道士に関心向けることになった。彼は、若い頃のミケランジェロの思想に大きな影響を与

えた、一五世紀のイタリアを代表する説教師である。卒業論文で彼の説教記録の一部を検討した私は、さらにこの研究を続けたと考えた。そして早稲田大学大学院の西洋史専攻へ進学し、現在はイタリア・ルネサンス史、とりわけ近世イタリアの宗教的状况を研究している。

二〇〇三年夏から一年間、ボローニャ大学に留学した。留学中、一番苦労したのは部屋探しである。ヨーロッパ最古の大学を擁するボローニャでは、学生のための下宿が不足しており、さらに、イタリア人家主の多くは、ヨーロッパの国々からやってきた留学生に部屋を貸すことを希望しており、日本人である私は、交渉にとっても苦労した。また、大学の史学科に通う日本人は、私の他には一人しかいなかった。最初の頃は、周囲から注がれる視線を苦痛に感じた。しかしこのような経験によって、自分が、イタリア、ヨーロッパの人々から見ると、異質な存在、「日本人」であるということに自覚することになった。